

豊臣秀吉

一龍斎貞花

講談師

信長の後継者として天下人となった豊臣秀吉は、「太閤検地」という日本初の全国規模の検地を行った。

その土地でどれだけの収穫があるのかを計測し、その収穫高（石高）を基準として税額を決定する方法。なんのために行ったかといえ、一番に税収を増やすため、全国の土地を把握することで、荘園などの私領や未納だった土地からも税を徴収できるようにしたのです。これによって平安時代から続いた荘園制は崩壊し、江戸・幕藩体制に通じる石高制が確立したのです。

石高を測定する際の物差しや枧を統一することで、納税者側が数字をごまかすことができないようにする意図もあり、小田原攻めに20万もの軍勢を投入できたのも、こうした増税による潤沢な兵糧が確保できていたから。さらに「刀狩り」によって兵農分離を推し進め、主たる納税者たる農民（当時は米が納税の中心）

を土地に縛りつけ、税収の基礎を盤石のものとしたのです。

中には、枧を大きくしたり、物差しを長くして多く取り立てた酷税大名もいたのです。

秀吉は、藤吉郎時代、納戸役（庶務係）の時に薪炭の消費を減らすなど手腕を発揮していて、仲々の経済通でもあった。信長に仕える前諸国を廻って行商をしていったことが経済感覚を養っていったのでありましょう。「刀狩」は僧兵や、農民から武器を没収し、武器を持って僧や百姓が騒動や一揆を起こさせぬようにしたばかりか、朝鮮出兵時の武器調達でもあった。これが我が国の武器所持を取締る「銃刀法」にもつながっているのです。

秀長、兄秀吉を非難しながら病没

秀吉の異父弟で、秀吉の天下取りに助力した大納言秀長は、病に伏せりながら秀吉の行状を心配し、見舞いに訪れた前野但馬守長康（藤吉郎時代から秀吉を支えた）に一命をかけて豊臣家の安泰を図りたいと語ります。

その一、淀君が鶴松（秀頼の兄2歳で病没）を産んだことにより、豊臣家の将来を危うくする恐れあり、諸将の動向が心配である。後に福島正則はじめ諸将家康に味方し大坂落城。

その二、大徳寺山門の利休木像寄進は、利休一門数千の発願で、利休に異心疑心の疑いをかけるのは非道である。

その三、朝鮮への出兵について。信長

公以来の治国、天下平定の念願を果たし、応仁以来の乱国は終わった。その間、諸将の出費、百姓の苦しみは言語に絶するものがある。異国に出兵すれば、財政疲弊するばかりでなく、異国の百姓まで苦しめるは必定。今は治国泰平を築くべき時で、朝鮮とは交易を図り、両国和楽の道を探すべきである。しかるに兄秀吉の所行は不可解なことが多い。先般、千利休を郡山城へ招き、胸中を披露し、秀吉に忠告してほしい旨を語り、長康にもこのことを伝えてほしいと伝えた。

秀長は52歳で死去。秀長健在であったなら朝鮮出兵はなかったであろうといわれるのは、秀長のこうした心情からで、利休の切腹もなかったであろう。豊臣家を支えた秀長の死が、秀吉の暴挙となり、心配通り豊臣は没落。トップに諫言できる腹心の部下が、いかに大切であるか。読みの同じ甘言する部下を重用してはいないでしょうね。

故郷優遇税制と牛蒡

一見厳しい秀吉の税制ですが、反面、人情味溢れるエピソードが、牛蒡の逸話です。

秀吉が関白に就任し豊臣姓を名乗るようになると、各国の大名、商人たちがこぞって祝いの品を送る。そこで故郷尾張中村でも、なにか贈り物をしようということになったが寒村のため豪華品は献上できない。相談の結果「特産品の牛蒡を送ろう」ということになり持参するや、

秀吉は大喜びし「お前たちを手ぶらで帰すわけにはいかん。土産に、尾張中村の年貢を永年免除としよう」この優遇処置によって、故郷の村は大変潤いました。数年後、裕福になった村人たちは秀吉に感謝するため、お金を出しあって豪華な友禅や駿馬、名刀を買い揃えて秀吉のもとへ。するとこの献上品を見た秀吉がかんかんに怒り、「なぜ牛蒡を持ってこないのだ、牛蒡を食べることで自分が農民だった頃を思い出し、民が豊かに暮らせる国を作らねばならんと再確認した。百姓の基本をないがしろにし、お前たちが牛蒡を忘れるような国を作るつもりはない。それほど裕福ならば優遇処置をやめるぞよ」と諭した。中村の百姓も改心し、それからは本来の農業に精を出して牛蒡を献上し続けたといえます。

はじめて城持ちの長浜城主になった時にも、名産の尾張大根を持参するや、歓待され、次々と大根を持参しお土産を頂いた。その後尾張から持参するのは重いからと近くで買って届けたところ追い返えされたという。いかにも庶民派秀吉らしい逸話もあります。「過酷な取立てをすると、民たちは農業をせず博打に走る。かといって国の根幹である税収は確保しなくてはならない」という税制のポイントに名将たちがいかに苦心したかがわかります。

野田政権もよく考えられよ。